

聞名仏教

第 142 号 毎月発行
(発行日) 2022 年 7 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
郵便振替「東本願寺護持基金」
00930-7-146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

石仏に思う

佐々木蓮磨

臼杵には有名な石仏があります。完全で、しかもいろいろな種類の石仏が集団している点では、なんとと言っても日本一だ、との折り紙がつけられてあります。しかし、その由来や、作者を知る記録や刻字のないことが惜しまれているのですが、また考えようによ

ると、それが却って精神的に、作品の価値を高めるようにも思われます。かつて大谷大学の教授をとめておられた歴史学者――故橋川正先生を、この石仏に案内したことがありますが、同氏が言われるには「これほどの名作を沢山つくりながら、一人の作者の名も刻まれていないことは、いかに、その作者が精神的に高い境地におられたか、を知ると同時に、その作品の奥床しさに頭が下る。おそらくこの石仏を刻んだ僧は、それが中国人か日本人かは分からないが、伝教や弘法以上の名僧であったろうと思

われる」と申されたのを記憶しておりますが、今日、この石仏が広く世間に宣伝され、毎日、幾多の観光客が集まってこられるが、この精神的な価値を見る人が幾人あるでしょうか？これを思うとき一抹の淋しさを感じしめるものがあります。また現大谷大学の名誉教授金子大栄先生をご案内したこともありました。先生はこの石仏を一見するや、「これは大したものですね！これを拝めば經典はいりませんね！」と嘆声を発せられたことを、今なお忘れることができないのであります。

先生が石仏に向かって、思わず発せられた一言は、今までの幾多の学者や芸術家が入念に調査研究して発表された説明にも増して、石仏の真価を説いて下されたものとおもいます。この橋川先生の観察と言い、金子先生の直感と言い、いわゆる世間の学者では

知ることのできぬ石仏の真価を、十分に説明して下されたように思われて嬉しく感じました。

また京大の教授をしておられた谷本博士を、この石仏に案内したことがありましたが、博士の見方には、深く反省せしめられるものがありました。博士は、この石仏を委しく観察して、言われるには、

「この石仏は実に大したものであるが、また、この偉大な宗教芸術を作り上げた人間の精神力に頭が下る。しかし、その偉大な精神がその後、この地に伝わらなかつたことは誠に遺憾に堪えない。このことは、地元の文化人や宗教家が深く考えねばならぬことであらう。今日は貴重な国の文化財として保護されているし、観光客が日々続々と集まってくることは決して悪いとは思わぬが、宗教的フンイキというものがさらさない。これはまことに残念であると思う。」

「この石仏は、どんな気持ちであつたらうか、おそらく永久に尊い仏教精神を伝えようとして、命を捧げられたものに相違ない。その作者の精神を思うとき、今日、観光客の見せ物にして、金をとることに終始することは、全く作者の精神を殺すというものである。この点、市当局はもちろん、地元の文化人、特に仏教徒は深く作者の精神に立ちかえつて、〈石仏見物〉から〈石仏参拝〉の方向に導くべきであるう云々」

と誠告されたので、われわれ一同は博士の言葉に一語もなく、深く慚愧したことでありました。

今日は臼杵石仏にかぎらず、一般に仏教の霊域が観光地に化して行く傾向にあります。果たして文化の向上というべきでしょうか。物質文明の道と精神文明の道とが、どうして一致し難い点をいかに解決し、どういう風に調和して行くかが、現代人に課せられた一つの大きな問題点ではないか？と思えます。

『安心清話』より

現代真宗問答 7

A 「何にもない
あなただからこ
そ、アミダ仏は
〈称えるばかり
で引き受ける〉

を聞いてお念仏申しても、
大悲の心にふれなくて、た
だ口に称えているだけとい
う場合があります」

えよ、助ける〉のを聴いて
いくのです」

B 「真宗の教えにであって、
何とか助かりたい、アミダ

のような私はどうしたらいい
のでしょうか」

B 「ただ、信心はなくても
〈我が名を称えるばかりで
助ける〉とのアミダ仏の本

B 「ただお念仏申している
というだけの状態ですね」

B 「仏法の先生によっては
お念仏を称えることはほと
んど申されず、アミダ仏の
お助けを一筋に仰せられる
先生もありますし、中には
〈称名に傾くと、信心をい
ただくの間に時間がかかる、
それよりも仏の救いを徹底
して聴くことに力を入れよ
〉といわれる先生もあり、お
念仏を称えることはいわれ
ないお導きもありますね」

仏にあいたい、信心をいた
だきたいと願って長年聴聞
を続けてきましたが、なか
なか信心をいただけません」

A 「そのどうにもならない
まま、そのままアミダ仏に
引き受けていただくばかり
です」

A 「ええ、信じることもで
きず、アミダ仏をタノムこ
ともできないなら、できな
いまま、どうにもならない
まま〈我が名を称えるばか
りで引き受ける〉との仰せ
のままにお念仏申すばかり
です」

A 「ええ、念仏往生の願を
聞いても、アミダ仏の大慈
悲にふれず、ただ称えてい
くばかりという、そういう
状態の人を二十願の人と言
えましょう。そして人間の
側から行けるのはこの二十
願の立場までです。真宗の
信心は人間の側の計らいや
努力でいただけるものでは
ありません。十八願の信心
はアミダ仏からたまわる信
心ですから」

A 「ええ、そういう道がよけれ
ばそれでいいと思います。
ただこれは、私の勝手な考
えかも知れませんが、真宗
の救いの〈お話を聞くだけ〉
で信心をいただくような人
は前世ですでにご本願に
あつて聴聞したいわゆる宿
善の厚いお方ではないかと
思います。そういう人は別
に称名念仏に心がけなくて
も真宗の信心をいただくこ
とができるのだと思います」

A 「こういう悩みはよく聞
きます。そのような状態を
真宗では十九願の人と言え
るでしょう」

B 「〈そのままのお助け〉と
何度もお聞きするのですが、
それでもどうにもなってい
かないのです。アミダ仏に
お任せができません」

A 「そのお任せができません
からこそ、アミダ仏は丸々
任せよと仰せられているで
はありませんか」

B 「それは真宗の信心とい
えますか」

B 「そうすると信じられな
いまま、分からぬまま、ア
ミダ仏の〈我が名を称えよ、
引き受ける〉の仰せのまま
ナムアミダブツ・ナムアミ
ダブツと称える、この道に
おのずから入っていくので
すね」

B 「十九願の人とは」

A 「多くの先生方の法話を
聴いたり、仏書をいろいろ
読んだり、座談をしたり、
内省したり、思案を重ねた
り、念仏したりして、何と
か助かりたい、信者になり
たい、ハッキリしたい、分
かりたいと求めているが、
真の依り処が見つからない
という立場の人です。いわ
ば今このままの自分ではダ
メなので、聴聞してなんと
かなろう、分かつよう、助か
ろう、ハッキリさせようと
励んでいる人のことです」

A 「この〈我が名を称えよ〉
の仰せを聞いて〈ああこん
な私を、有難い〉と直受け
に受け取っているなら十八
願の信心でありましょう」

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「ええそうです。こうし
て本願の仰せを聴いては称
え、称えては仰せを聴く。
称えつつ、お念仏のお心(極
重悪人よ、ただ仏の名を称

A 「まさか私の姿です。こ

B 「信心も有難いものにも
ありませんが」

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「ええそうです。こうし
て本願の仰せを聴いては称
え、称えては仰せを聴く。
称えつつ、お念仏のお心(極
重悪人よ、ただ仏の名を称

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

A 「私を丸々引き受けて下
さる大慈悲に充たされて、
何も言うことなしとなるの
です。しかし、この仰せ

B 「宿善が厚い人ならそういう道も可能だといわれるのですね。」

A 「ええそうです。しかし、もし宿善が乏しい人の場合は、そういう信心ばかりを強調されるお方について、堂々めぐりをして、いつまでたっても分らないということもあるのではないかと思います」

B 「先ほど、どうにもならなくなって称名念仏一つになつた人は二十願の人と言われましたが、二十願とは」
A 「これはアミダ仏の四十八願の中の第二十願で、

たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞き、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずんば、正覚を取らじ。」

という誓いです。名号を聞いて、この名号を自分の功德を積むように称えて浄土に生まれようとする人も、
へ果遂せずんば、正覚を取

らじ)で、いつかは必ず救いに至らしめましようという如来法藏様の誓いです。お念仏を称えることによつて救っていただくこととする人です。いまだへ我が名を称えよ、助ける)の仰せを聴いても、アミダ仏の絶対の大悲が分からなくて、称えたらいつかは助けて下さると受け取って念仏に励む人です」

B 「いわゆる自力念仏の人のことですね。まだ第十八願のお心が頂けず疑惑の人といわれるのですね」
A 「ええ、十八願のへ我が名を称えるばかりで助ける、そのほかになにもいらぬぞ)という大悲のお心が分からず、念仏一つを称える道に出ている人は二十願の人です。二十願は、自力念仏の仏智疑惑の人として批判なさるだけの願ではありません。とにかく念仏往生と聴いて、信心はなくとも念仏一つになつた人は、へ果遂せずんば、正覚を取らじ)と誓われ、いつかは必ず十八願の救いに至らせずにはおかない、いわばへ果遂せず

はおかない)という大悲が籠もっている願です」
B 「宗祖のご和讃に、
定散自力の称名は
果遂のちかいに帰してこそ
おしえざれども自然に
真如の門に転入する
信心のひとにおとらじと
疑心自力の行者も
如来大悲の恩をしり
称名念仏はげむべし
とありますね。また『ご消息』にも、
往生を不定におぼしめさんひとは、まずわが身の往生をおぼしめして、御念仏そうろうべし。
とありますが、これらの文は二十願のお心なのですね」
A 「ええそうです」
B 「真宗の教えを聞き、へそのままなりで助ける)という十八願の教を聴いて、そのまますつと受け入れるだけで助かるのに、なぜ、まわりくどいと考えられる二十願に入れてから十八願に

帰入せしめたもう道を如来法藏様は用意されたのでしようか」
A 「それは、人は自力執心が強いからだと思えます。邪見傲慢で、自らをたのむ自力執心が強く、真宗の教えを聞きアミダ仏の救いを聴いても、なおアミダ仏を掴もうとし、信心を掴もうとし、ハッキリさせようと、自我の私の側から、宗祖のいわれるへ得んとはからう)ことがやまず、へなろう)へ得よう)へつかもう)という自我の計らいに固執する心が強いのです」
B 「自分をたのみにする心が強いから、アミダ仏にまつたく身をゆだねることができないのですね」
A 「私たちは、自力の執心が強いから、そこで如来法藏様は、掴むのならお念仏一つを掴ませて、念仏する中でお念仏に籠もっている大悲を聴かせる、いわば専修念仏に入れしめて、そして念仏に掛けられている大悲の心を聴かせることによつて、称えて助かろうとする計らいの手を離させ

てアミダ仏をたのませてくださるのです」
B 「そのお話を聞いて思ひ出すのですが、昔、木村無相さんがはじめは真言宗の修行をして道を求め求めて、それがダメでとうとう浄土真宗一本に行き着いたので、すが、なお道が開かれず、困っていたとき、へ極重悪人唯称仏)のお心を聴いて、念仏一つに入られた時、その時の詩に、
道がある 道がある
たった一つの 道がある
ただ念仏の道がある
極重悪人唯称仏
となり、念仏往生の願に従つてへただ念仏せよ)の仰せのままにお念仏一つの道に出られましたね」
A 「ええ、あれは典型的な二十願の道に出られたといつていいと思います。そしてなにかにつけてお念仏を申しながら、念仏往生の願のお心を聞きつけていかれたのです。そしてとうとうへただ称えよ)の仰せに絶対の大悲を感じ、そこにア

対の大悲を感じ、そこにア

ミダ仏との深いであいを経験されたのです。」

B 「十八願のお心に深く触れられたのですね」

A 「ええそうです。それ以後大変深いところに入っていきました。西元宗助先生は（最晩年の無相さんのお念仏の味わいは幽邃である）と言われていました」

B 「木村無相さんの歩みは、道を求めているいろいろやつてる中で行き詰まり、お念仏一つを称え聞くという道に入る、そしてそこから十八願の信心に転入する、という道、いわば十九願から二十願そして十八願へという三願転入の道を典型的に歩まれたといえるのですね」

B 「でも、こういう道を歩む人は少ないように思いますが」

A 「現実的には少ないかも知れませんが、如来法藏様が称名念仏を選び取り、これに念仏往生の誓いをかけ、この本願の念仏で一切衆生を救おうとされた道が十八願・十九願・二十願の法ですから、むしろこの道が如来法藏様がお勧め

になる本道ではないかと思えます。しかもこれは助かりたいと思ふ人は無理なく行ける道だと思います。二十願のお念仏一つになれば、あと十八願への転入は人間の側からの手出しは無用、如来様のお仕事ですから。人間としては念仏を称え、お念仏のお心を聴くことを続けるばかりです。信心がいただけるかどうかはそれは人の計らうことではありません。そこを宗祖は『信巻』の初めの部分に、

常没の凡愚・流転の群生、無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信樂実（まこと）に獲ること難し。何をもつてのゆえに。いまし如来の加威力に由るがゆえなり。博く大悲広慧の力に因るがゆえなり。

と仰せられています。真実の信心をまことに獲ることは凡夫には難しい。なぜなら信心は如来様の大悲のお力によって与えられるのだからといわれています。私に信心をいただくのはひとえに如来様のお力によって

である。だから信心をいただくということは人間の側が手出しのできないことです。ですから如来様が念仏を申せといわれるままに念仏を申し、念仏のお心である本願を私たちはよく聞くことを続けていくほかにはないですね」

B 「称えつつ聞き、聞きつつ称えるばかりということですね」

A 「ええ、（助からぬ者を、ソノママナリデ助ける）のお心を、称える念仏において聞くのです。二十願には

（果遂の誓い）が籠もっています。きつと必ず十八願に転入せしめずにはおかないという如来様の大悲の願心が籠もっているゆえに、十八願におのずから、知らぬまに転入せしめられていくのです。有難いですね」

B 「お念仏一つの人がもしいこの世で十八願に転入できないままに亡くなるとどうなるのですか、空しくなるのですか」

A 「いいえ、二十願のお念仏一つの人はアミダ仏のお力によって、たとえ信心が

無くても浄土のかたほとりといわれる化土の浄土に生まれることができ、そこで更に法のお育てを受け、真実の浄土に遂には生まれさせてくださる、と仏陀は仰せられています。これも有難いです」

B 「十九願から二十願、二十願から十八願へという三願転入の道は如来法藏様が愚鈍の凡夫に手を差し伸べてくださった大慈大悲のご方便の道であり、誰でもがたどれる道であると感じました」

A 「信心ばかりを説かれるお方にはこういう話はまどろっこしいとも思われ、またそういう道は自力くさいと受け取られるかもしれないが、信心をいただくことは難中の難であるという現実を身に沁みて感じるとき、すでに三願転入の道が用意されていることに大きな慈悲を感じます。ただ、このような誰にでも開かれている信心への道すら歩む人が少ないのもまた現実です」

（了）

【住職雑感】

プーチン氏が「ウクライナはロシアと一体だ。今ウクライナのロシア人がネオナチに迫害されている。助けなければいけない」という理由で、ウクライナに侵攻した。

「ロシア、ウクライナ・ベラルーシは三位一体だ」と旧ロシア帝国時代の歴史観に立った発言をし、その上（米国の真の目的はロシアを内部から崩壊させることにある）と考えられていると報道されている。ロシアの指導者がこういう考えに立っている限り、戦争はいつでも起こり得る。

また中国の指導者は、台湾は中国の領土であり、尖閣列島も南シナ海も本来中国のものだという考えを持っているようだ。『ウクライナにいるロシア人はどうぞウクライナで幸せになつてくれ、台湾にいる中国人はどうぞ台湾で幸せになつてくれ』というような世界観は持てないものか。これに思うと悲惨な戦争の一番元にあるのは資源や領地の獲得というような経済や実権の問題でも、一国の指導者たちがどういう世界観や歴史観や人間観をもっているかが主な戦争の要因であると思わざるを得ない。軍備を充実されることだけでは戦争はなくならない。仏教という大悲の智慧に基づく世界観が国々の指導者の世界観の軸になって欲しいものである。